

文覚発心説話考

鶯 山 樹 心

はじめに

歴史上の人物高雄の文覚は、いつどのような事情によって発心出家をしたのか、参照すべき精確な資料が見出されていないのが残念である。ただし、源平盛衰記は、「文覚道心の起りを尋ねれば女故なり」（津巻第十九）として、以下に述べるような興味ある筋の物語を一章独立の形で伝えている。

すなわち——上西門院の北面であった遠藤盛遠は、十七才の春三月、渡辺橋の橋供養に警護役として出仕した際、参詣人の流れの中に一きわ目立って美しい、一人の若い女房の姿を見てひどく心を惹かれたが、それは実は盛遠にとつては内戚の小母にあたる衣川の娘で、今は左衛門尉渡の妻となっている袈裟であることを知って以来といふのは、殆ど自制し難い愛執の念に悩み疲れる身となつてしまつた。秋九月、突如盛遠は発作的に小母衣川を襲い、袈裟に対する不如意の恋の恨みを晴らすために小母を殺し自分もともに死ぬ覚悟と迫つたが、周章狼狽した衣川は、ともかくもこの家に袈裟を呼び寄せて盛遠に逢わせることを条件に辛くもその場の難を切りぬけた。一方、この不

慮の事態を知った袈裟はいかにすべきか途方に暮れて悲嘆したが、親の一命には替え難く、その夜はやむなく盛遠の意に従わざるを得なかった。かくて、袈裟にとつては呪わしい一夜は明けた。しかるに、盛遠の意志はきわめて強く、所詮は逃がれ得ないであろう身の行く末を思いあぐねた袈裟は、「誠に（吾を）浅からず思召す事ならば、唯思ひ切つて（吾が夫）左衛門尉を殺し給へ……」と盛遠に誘いかけ「我家に帰つて、左衛門尉が髪を洗はせ、酒に酔はせて内に入れ、高殿に伏せたらんに、ぬれたる髪を搜つて殺し給へ」と謀殺の手はずを示した後、かろうじて一旦の帰宅を許された。さてその夜ふけ、雀躍した盛遠は渡の屋敷に忍び込み、手筈どおりに首尾よくその首を打ち落したと合点したが、意外にもそれは最愛の袈裟のものであった。袈裟はけなげにも覚悟のうえで夫の身替わりとなり、婦節を全うしたのであった。この晴天の霹靂ともいふべき事件は、一旦の愛欲にめしいた盛遠の心に痛切な懺悔の念を催させずにはおかず、一方、盛遠の告白によって一切の顛末を知って無常を悟り、今はその罪を許した袈裟の夫渡と共に翻然として発心出家する要因となった——というものである。

ところで、右のような文覚発心の物語は覚一本系平家物語には全く伝えられていない。八坂本系諸本には僅かに「(文覚と申すは)十九の年、あさからず思ひけるをんなにをくれて、けんごのどうしんをこし、出家入道して……」(中院本)「十九ノ年、鳥羽ノ典女ガ為ニ堅固ノ道心ヲ発シ出家シテ……」(如白本)などと記されているだけで、具体的内容はない。⁽¹⁾前記のようなまことに異常な女性問題を主軸とした文覚発心の物語を伝えているのは、源平盛衰記の外に、長門本・延慶本・四部合戦状本・南都本などのいわゆる増補本系平家物語諸本であるが、ただしその伝え方はまた本によってかなりの相違がある。たとえば、長門本は盛衰記にほぼ同じく、物語の主要人物となる非

業の人妻の素姓を盛遠外戚の小母衣河の娘、渡左衛門の妻とするが、これに対して延慶本は、故三条佐伯頭の娘、鳥羽秋山刑部左衛門の妻とし、四部合戦状本は、七条西洞院世佐尼の娘、鳥羽秋山修乘の妻、また南都本は、既に夫ある上西門院の雑司阿津磨という女とするなどそれぞれに異なっていて、この主要人物設定の相違は、自然盛遠との人間関係の相違、物語の構成詞章の相違などをきたしながらそれぞれに定着していることが知られるのである。

ところで、源平盛衰記は、前記の発心談以前の箇所（曾巻第十八「文覚頼朝に謀叛を勧め進す事」に、当の文覚の出生から幼少年期を経てやがて出家をし、その後諸国行脚をするに至るまでの数奇な歷程を一箇所に集約したかたちで記しているが、ここでは文覚の出家の要因は、彼を産みながら難産のために死んだ母、また彼が三才の時に死んだ父を思う深い悲しみの心にあったような書きぶりをしており、またこのことに関連して同巻第十八「龍神三種の道念」にあったと語らせるなど、前記の異常な女性問題を出家の直接動機とする話とは本質的に異なった伝えかたをしている事実が注意されるのである。

さて、当初に述べたように、文覚発心の事情については参照すべき確実な歴史資料を見出し得ないこと、また、覚一本系平家物語諸本には文覚の発心に関する記述を一切見ないこと、増補本系諸本には前記のごとき女性問題にかかわる発心談をそれぞれ記載しているが、しかし、その伝え方は本によってかなり相違しており、ことに、源平盛衰記の場合などは別章にその発心談とは本質的に内容を異にした出家入道の動機を伝えていることなどの理由から、源平盛衰記ほか増補本系平家物語諸本によって伝えられるところの、人妻誤殺という異常な話を主軸とした

わゆる文覚発心談は、はたして事実に取材したものであったかどうか、おおいに疑わしいと言わざるを得ない。

そこで私は、いまこの種の話の真偽にはとらわれず、先ずこれを一種の発心説話として把える立場に立って、その生成定着流布の事情等について考察した一端を、主として源平盛衰記の場合を中心に述べたいと考える。

一 文覚発心談と東帰節女伝

文覚発心談の説話的性格を考える場合に先ず第一の手がかりとなるのは、源平盛衰記および延慶本平家物語が各々この発心談に添えて記載している異朝孝子譚「東帰節女」の伝であろう。

さて、源平盛衰記は文覚発心談の末尾に、「かかるためしは異国にも有けり」として、次のような一文を添えている。

昔、唐に東帰の節女と云ひけるは、長安の大昌里人と云ふ者が妻なりけり。其の夫に敵あり。常に伺ひけれども殺す事叶はず。かたき節女が父を縛つて女を呼びて云く、「汝が夫は我が大なる敵なり。其の夫を我に与へずば汝が父を殺さん」と云ひければ、女答へて云く。「妾夫を助けんために、争か生育の父を殺させん。妾常に楼上に寝ぬる。夫は東首に臥し、妾は西を枕とす。須く来つて東首を切れ」と教へて、家に帰つて思はく、父に恩愛の慈悲深し、夫に偕老の情の浅からず。夫の命を助けんとすれば父の命危し。父が身を育まんとすれば夫の身亡びなんとす。如かじ父を助けんが為に、夫を敵に与へつ、我又夫が命に替らん。とて、自ら東首に伏して夫を西に枕せり。敵伺ひ入つて、忽ちに東首を切つて家に帰りて、朝にこれを見れば夫の首にあらざし

て妻が頭なり。敵大きに悲しみて、「此の女父の為に孝あり。夫が為に忠あり。我いかげせん」と云ふ。終に節女が夫を招きて、長く骨肉の昵びをなしけり。夫婦の語らひとりどりなり。彼は今生の契りを結び、これは菩提の道に入りけり。(日本文学大系本による)

一読して明らかなきことは、先ずこの「東婦節女」の話は、二人の男の仇敵関係を事件の発端としているのに対して、文覚発心談は男女の愛憎関係を発端としている点が相違するほかは、女の親を弔として男が女に接近すること、女が一命に替えて敵の目をあざむき夫の身替わり死を遂げること、つづくその事件の結末など、殆ど類同したすじ道をたどっている点であろう。

次に延慶本平家物語は、文覚発心談に引き続いて別に一章をもうけ、「異国にも悲しき男にかりて後生を助けられし女も有ぞかし」として、「遠く尋異朝、先昔唐国に夫を思へる女あり。東婦の節女と是を云。長安大昌里人の娘なり」と、同じく東婦節女の話を引きいているが、この方は二人の男がなぜ敵対関係をむすばねばならなかったかについて、「汝が夫を我に殺させよ。しからば君に伴ひて春花明月の詠をもなし山鳥白雪の興をもまさむ」など、敵はかねて節女に懸想するゆえに、その夫を殺そうとするような表現をしており、特に、誤って節女を殺害した敵はその夫に対して、「速に我身をいかにもなせ。汝失わむとしてかかる憂き目をみつる」と懺悔し、これに対して節女の夫は、「敵すでに来るを殺していみじかるべきにあらず。只かゝる憂世を背て女の菩提を祈らむ」と答え、「本鳥を切、さまをかへ——各彼の女の後生をぞ祈りける」と結ぶなど、全体の構想を殆ど発心談風に潤色することによって、先に示した盛衰記における東婦節女伝よりも構想・構成の面において一そう文覚発心談に類同した先蹤談

として記録していることが知られるのである。

ところで、長門本・四部合戦状本・南都本などは、特に右のような異朝談をまとまった形では付加してはいない。しかし、長門本は盛遠に迫られた渡の妻の述懐の形で、「昔、東武の節女は夫の命にかはりけり。今、我身の上と覚えつゝ……」とし、南都本もまた、「東吼ノ乳母トカヤガ様ニ、我コソ夫ノ命ニ替ナメ」とするなど、それぞれ節女の呼称を異にしてはいるが、東婦節女と同類の先蹤談の存在を仄めかした表現をしている点が注意される。

二 東婦節女伝の伝承

さて、「東婦節女」の伝は、実は早く平安朝期にわが国に伝えられた中国世俗孝子伝の類に見え、またわが国において編纂された説話集の類に伝えられている事実が知られるところから、平安——鎌倉期にかけてかなり広範囲に流布した説話であったことが想像される。たとえばわが国における現存の文献のうえで、「東婦節女」伝を収録した最も古いものは孝子傳である。この「東婦節女」伝については京都大学蔵船橋本ならびに陽明文庫蔵近衛本孝子傳の二本を資料として調査したが、その本文は次のとおりである。

(船橋本孝子傳下巻第四十二話)

東飯郎女者長安冒里人之妻也、其夫為人 東飯ノ節（？）女ハ長安昌里ノ人ノ妻ナリ。其ノ夫人トナリ敵有リ。
有敵、敵人欲敏夫来至縛妻之父、女聞所 敵人夫ヲ殺サント欲シ、来タリ至リテ妻ノ父ヲ縛ル。女父ヲ縛ル所
縛、出門也仇語女曰、不出汝夫將敏汝父、 ヲ聞ク。門ヲ出ヅルヤ、仇女ニ語ゲテ曰ク、汝ガ夫ヲ出サズンバ將
謂仇云、豈由夫敏父、妾常寢楼上、夫東 ニ汝ガ父ヲ殺サントスト。仇ニ謂ヒテ云ク、豈夫ニ由リテ父ヲ殺サ
首妻西首、亘寢後來斬東首之、於是仇人 シメンヤ。妾常ニ楼上ニ寢タリ。夫ハ東首ニシ妻ハ西首ニス。宜シ
既知、於時婦方便而相換常方婦東首也、 ク寢タル後ニ来タリテ東首ヲ斬レト。是ニ於テ仇人既ニ知ル。時ニ
仇来斬東首賚之至家明旦視之此女首也、 於テ婦方便シテ常ノ方ヲ相ヒ換ヘ婦東首ニス。仇来リテ東首ヲ斬リ
爰仇人大傷曰、嗟乎悲哉、貞婦代夫捨命、 之ヲ賚チテ家ニ至リ明旦之ヲ視レバ此女ノ首ナリ。爰ニ仇人大イニ
乃解仇心永如骨肉也、鷹鳥□鳥也、知恩 傷ンデ曰ク、嗟乎悲シイ哉。貞婦夫ニ代リテ命ヲ捨ツト。乃チ仇心
与義之鵲時哺子老時哺母、反哺之恩猶能 ヲ解キ、永ク骨肉ノ如クナリス。鷹鳥ハ□鳥ナリ。恩ヲ知リ義ヲ与
識哉、何況人乎、不知恩義者不如禽鳥耳 ニス。鵲ノ時子ニ哺ミ老シ時母ニ哺ム。反哺ノ恩猶ホ能ク識レルヲ
也。 (影印本による)

(近衛本孝子傳下卷第四十一話)

東飯節女者長安大昌里人妻也、其夫有 東飯節女ハ長安大昌里ノ人ノ妻ナリ。其ノ夫仇有リ。仇人其ノ夫ヲ
仇、々人欲敏其夫、聞節女孝令而有仁義、 殺サント欲シ、節女孝令ニシテ仁義有ルヲ聞キ、仇人女人ノ父ヲ執

仇人執縛女人父謂女曰、汝能呼夫出者吾
 即放汝父、若不然者吾当斂之、女歎曰、
 豈有為夫而令斂父哉、豈又亦仇人而斂
 夫、乃謂仇人曰、吾常共夫在樓上、寢夫
 頭在東、密以方便令夫向西女自在東、斂
 人果來斬將女頭去謂是女夫、明且視之果
 是女頭、仇人大悲嘆感其孝烈、解怨无復
 來懷斂夫其夫之心、論語曰、有斂身以成
 仁无求生害人此之謂也

縛シテ女ニ謂ヒテ曰ク、汝能ク夫ヲ呼ビ出サバ、吾即チ汝ガ父ヲ放
 タン、若シ然ラズンバ吾当ニ之ヲ殺サント。女歎ジテ曰ク、豈夫ノ
 為ニ父ヲ殺サシメンヤ、豈亦タ仇人ニ夫ヲ殺サシメンヤ。乃チ仇
 人ニ謂ヒテ曰ク、吾常ニ夫ト共ニ樓上ニ在リ。寢ヌルニ夫ノ頭東ニ
 在リト。密ニ方便ヲ以テ夫ヲ西ニ向ハシメ女自ラ東ニ在リ。仇人果
 シテ来リ將ニ女頭ヲ斬リテ去リ是レ女ノ夫ナリト謂フ。明且之ヲ視
 レバ、果シテ是レ女頭ナリ。仇人大イニ悲嘆シ其ノ孝烈ニ感ジ、怨ヲ
 解キテ復ビ来リテソノ夫ヲ殺スノ心ヲ懷クコトナシ。論語ニ曰ク、
 身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成ス有リ、生ヲ求メテ以テ人ヲ害スルナキハ此
 ノ謂ナリト。

(原本による)

さて、孝子傳における右の二文を比較してみると、先ず節女の身替わり部分を中心とした前後の記述に若干の差
 違は認められるが、その内容は両者ともに前掲の源平盛衰記における東婦節女傳と殆ど同じものであることが容易
 に知られる。なお船橋本孝子傳における「鴈鳥□鳥也……」以下の文は、内容上本説話自体とさほどに密接ではな
 いように思われる。近衛本孝子傳ではこの部分に類似した一文が、収載の全説話を総括したようなかたちで下巻末
 に別章としてある事実⁽²⁾に照らして、船橋本の場合はおそらく東婦節女傳とは別の異文を混入したものであろうと私
 は想像している。

次に、今昔物語集第十晨旦部には「長安女代夫違枕為敵被語」と題した左記のような説話がある。

今ハ昔、震旦ノ□□代ニ長安ニ一人ノ女有ケリ。形美麗ニシテ心正直也。其ノ女ニ夫有リ。其ノ夫ニ敵有リ。其ノ敵此ノ女ノ夫ヲ敏サムガ為ニ其ノ家ニ来レリ。其ノ時ニ其ノ夫、他所ニ行テ其ノ家ニ无シ。敵見ルニ、夫无ケイバ、妻ノ父ヲ捕ヘテ縛ル。女、父被縛レタリト聞テ、内ヨリ出タリ。敵、女ヲ見テ告テ云ク、我レ、汝ガ夫ヲ敏サムガ為ニ此ニ来レリ。而ルニ、汝ガ夫无シ。汝ジ、夫ヲ不出ズハ、汝ガ父ヲ敏サムトスト。女、敵ニ答ヘテ云ク、豈ニ、夫ノ无キ故ニ父ヲ敏ス事有ラムヤ。然レバ、君、我ガ言ニ随テ、後ノ時ニ、此ノ家ニ来テ、我ガ夫ヲ可敏シ。此ノ寢屋ニハ、夫ハ東枕ニ臥シ、我レハ西枕ニ臥ス也。後ニ来ラム時、東枕ナラム夫ヲ可敏ト。敵、此ノ事ヲ聞テ、父ヲ免シテ去ヌ。其ノ後、夫来レリ。妻、夫ニ語テ云ク、今夜ハ、我レ、東枕ニ臥サム。君ハ西枕ニ臥セト云テ臥ヌ。即チ、敵入り来テ、東枕ナル妻ヲ、此レ、夫ト也ト思テ敏ソツ。其ノ時、見レバ、既ニ妻ヲ敏セリ。夫ハ命ヲ存セリ。敵キ、此ヲ見テ痛ミ歎ク事无限シ。然レバ、此レ、妻ノ夫ニ代テ、枕ヲ替ヘテ被敏ル也ケリト知ヌ。其ノ後、敵大キニ此レヲ哀ムデ、永ク怨ノ心ヲ止メテ、始メテ骨肉ノ契ヲ成ケリ。然レバ、昔ハ如此ク、我ガ身ヲ弃テ夫ノ命ヲ生クル女人有ケリ。此レ、極テ難有キ事トゾ、聞ク人皆云ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

(日本古典文学大系本による)

右の説話は、特に節女の名を明らかにしていないが、その内容は先に掲げた孝子傳所収の「東婦節女」伝と本質的に同一のものである。なお、この「東婦節女」の伝は、「注好選集」にも「郎女代枕」の題で収録され、更に「注好選集」の影響下に成立をみた「私聚百因縁集」にも「東坂節女」の題で収録されているが、これらの説話集

はその成立の時期よりみて、源平盛衰記との直接関連はないと判断されるのでここでは省筆する。

さて、孝子傳・今昔物語集あるいは注好選集・私聚百因縁集など一連の説話集に伝えられ、一方源平盛衰記・延慶本平家物語等の増補本系平家物語に、文覚発心談の先蹤談として直接あるいは間接に伝えられている「東婦節女」伝は、更にさかのばればその典拠をいずれに求め得るものであろうか。この点については、特に今昔物語集諸説話の出典關係を博搜された芳賀矢一博士や山田孝雄博士の研究によれば、共に劉向列女傳節義部所収の「京師節女」あるいは晉書載記第十四「苻融傳」に求められることが指摘されている。

先ず、劉向列女傳「京師節女」の本文をみると、

京師節女者長安大昌里人之妻也、其夫有 京師ノ節女ハ長安大昌里ノ人ノ妻ナリ。其ノ夫讐人有リ。其ノ夫ニ
讐人歆報其夫而道徑、聞其妻之仁孝有 報ント欲シテ道徑(?)ニ、其ノ妻ノ仁孝義有ルヲ聞キ、乃チ其ノ妻
義、乃切其妻之父、使要其女為中譎、父 ノ父ヲ切シ、要メテ其ノ女ニ中譎ヲ為サシム。父其ノ女ヲ呼ビテ之
呼其女告之、女計念、不聽之則殺父不 ヲ告グ。女計念スラク、之ヲ聽カザレバ則チ父ヲ殺スノ不孝、之ヲ
孝、聽之則殺夫不義、不孝不義雖生不可 聽カバ、則チ夫ヲ殺スノ不義、不孝不義生ズト雖モ以テ世ニ行フ可カ
以行于世、欲以身当之、乃曰許諾日、且 ラズ。身ヲ以テ之ニ当ラント欲スト。乃チ且ニ許諾シテ曰ク、且日
日在楼上、新沐東首臥則是矣、妾請開戸 楼上ニ上リテ、新タニ沐シテ東首シテ臥スルハ則チ是ナリ。妾請フ
牖之、其家乃告其夫使臥他所、因自沐居 ラクハ戸牖ヲ開キテ之ヲ待タント。其ノ家ニ還リ乃チ其ノ夫ニ告ゲ
楼上、東首開戸牖而臥夜半讐家果至、断 テ他所ニ臥セシメ、因ツテ自ラ沐シテ楼上ニ居リ、東首シテ戸牖ヲ

頭持去、明而視之乃其妻之頭也、譬人哀痛之以有義遂積不殺其夫、君子謂、節女仁孝厚於恩義也、夫重仁義輕死亡之高也、論語曰、君子殺身以成仁、無求生以害仁此之謂也

頌曰

京師節女

夫讐切父

要女問之

不敢不許

期處既成

乃易其所

殺身成仁

義冠天下

開キテ臥ス。夜半讐家果シテ至リ、頭ヲ断チテ持チテ去ル。明ケテ之ヲ視レバ乃チ其ノ妻ノ頭ナリ。譬人之ヲ哀痛シ、義有ルヲ以テ遂ニ積シテ其ノ夫ヲ殺サズ。君子謂ヘラク、節女ハ仁孝恩義ニ厚キナリ。夫レ仁義ヲ重ンジ死亡ヲ輕ンズルハ行ノ高キナリ。論語ニ曰ク、君子ハ身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成シ、生ヲ求メテ以テ仁ヲ害スル無キハ此レ之ノ謂ナリト。

頌ニ曰ク

京師節女ハ、

夫ノ讐父ヲ切シ、

女ヲ要シテ之ヲ問ヘドモ

敢テセズシテ許サザリキ。

期スル處既ニ成ル。

乃チ其ノ所ヲ易ヘ、

身ヲ殺シテ仁ヲ成ス。

義ハ天下ニ冠タリ。

(四部叢刊所収「古列女伝」による)

とあり、この「京師節女」伝は、その構成内容から見てまさしく孝子傳あるいは今昔物語集以下の諸説話集に伝えられた「東婦節女」の原型を示すものと考えられる。ちなみに晉書載記第十四「苻融傳」は、その内容を検討してみた結果、東婦節女伝との直接の関係は認めがたいように思われる。

ところで、近衛本孝子傳「東婦節女」の本文は既述のごとく「(東飯)節女者長安大昌里人妻也」「聞節女孝令而有仁義……」「論語曰、有敏身以成仁、无求生以害人、此之謂也」等の文を有している点において船橋本孝子傳よりも前掲の「京師節女」伝と密接な本文関係を有するとみななければならない。ちなみに節女の呼称である「京師」「東婦」の相違は、私見によれば本説話の伝承過程に生じた誤写であつて、特別の意味はないものと判断される。⁽³⁾

次に、劉向列女伝所収の京師節女・孝子傳・今昔物語所載の同説話の本文内容を比較して注意されることは、(イ)本説話のクライマックスとなる節女の身替わり部分(ロ)本説話冒頭における節女の紹介部分、その他について指摘される説話的な増益ないしは変化の模様である。以下しばらく、重複を厭わず、右の二点に該当する各本文を抄出して、この間の事情を明らかにしておきたい。

(イ)

(劉向列女伝「京師節女」)

……旦日樓上ニ在リ、新ニ沐浴シテ東首シテ臥ルハ則チ是(わが夫)ナリ。妾請フラクハ戸牖ヲ開キテ之ヲ待タント。其ノ家ニ還リ、乃チ其ノ夫ニ告ゲテ他所ニ臥セ使メ、因リテ自ラ沐浴シテ楼上ニ居リ、東首シテ戸牖ヲ開キテ臥ス。夜半警家果シテ至リ、頭ヲ断チテ持チ去ル。明ケテ之ヲ視ルニ、乃チ妻ノ頭ナリ。

(船橋本子傳「東婦節女」)

……妾常ニ楼上ニ寝タリ。夫ハ東首ニシ妻ハ西首ニス。宜シク寝タル後ニ来リテ東首ヲ斬レト。是ニ於テ仇人既ニ知ル。時ニ於テ婦方便シテ常ノ方ヲ相ヒ換ヘ。婦東首ニス。仇人来リテ東首ヲ斬リ、之ヲ賚チテ家ニ至ル。明旦之ヲ視レバ、此レ女ノ首ナリ。

(近衛本孝子傳「東婦節女」)

吾常ニ夫ト共ニ楼上ニ在リ。寝ヌル夫ノ頭ハ東ニ在リト。密ニ方便ヲ以テ夫ヲ西ニ向ハ令メ、女ハ自ラ東ニ在リ。仇人果シテ来リ將ニ女ノ頭ヲ斬リテ去ラントシ、是レ女ノ夫ナリト謂フ。明旦之レヲ視レバ、果シテ是レ女ノ頭ナリ。

(今昔物語集同説話)

……此ノ寢屋ニハ、夫ハ東枕ニ臥シ、我レハ西枕ニ臥ス也。後ニ来ラム時、東枕ナラム夫ヲ可敏ト。敵、此ノ事ヲ聞テ、父ヲ免シテ去ヌ。其ノ後、夫来レリ。妻、夫ニ語テ云ク、今夜ハ、我レ東枕ニ臥サム、君ハ西枕ニ臥セト云テ臥ヌ。即チ、敵入り来テ、東枕ナル妻ヲ、此レ夫ト也、ト思テ敏シツ。其ノ時、見レバ、既ニ妻ヲ敏セリ。夫ハ命ヲ存セリ。

既に明らかなように、先ず「京師節女」は、節女の身替わりの手だてとして「在楼上」「新沐」「東首」「開戸牖」

という四つの事柄を備けて、敵がその手だてに従った結果誤って節女を殺し、その事実を知ったのは事件の翌朝であつたとしている。次に、孝子傳における「東婦節女」は、船橋本・近衛本両本共に「在楼上」「東首」の二つの事柄を受けつぎ、「新沐」「開戸牖」の二つを除いて、「東首」に対するに「西首」という新しい手だてを設け、そこにあつた面の説話的興味の増加をはかつていることが知られる。今昔物語集は、標題に「長安女、代夫違枕……」と掲げているように、孝子傳にならつて「東枕」に対して「西枕」という身替わり方法を伝え、これに特別の説話的興味の重点を置いているかに見える。ちなみに今昔物語集では京師節女並びに東婦節女の場合とは異なつて、敵が女の身替わり死を確認したのはその殺害と同時にあつたとしてゐるが、これは今昔物語独自の構想と認められる。

ところで、源平盛衰記に引かれた「東婦節女」伝における節女の身替わり部分は、「妾常に楼上に寝ぬる。夫は東首に臥し妾は西を枕とす。須く来つて東首を切れ」となつてゐることは既に見た通りであり、延慶本平家物語における同説話の該当部分もまた同様に「我。夫。楼。の上。に。ね。たら。む。を。殺。せ。夫。は。東。に。臥。す。べ。し。我。は。西。に。臥。む。ず。る。な。り。東。の。枕。を。鉾。を。以。て。さ。せ」と、両本共に孝子傳ないし今昔物語集に準じてゐる。ただし、敵が女を誤殺したことを確認したのは事件の翌朝であつたとする点では今昔物語集とは異なつてゐるのである。

(H)

次に、説話冒頭における節女の紹介のしかたを各本比較してみると、相互に微妙な相違がある。先ず劉向列女伝においては「京師節女者長安大昌里人之妻也」とあるが、孝子傳においては「東。販。節。女。者。長。安。大。昌。里。人。妻。也」(近衛本)「東。販。即。女。者。長。安。冒。里。人。之。妻。也」(船橋本)と表現のうえに相違があり、今昔物語集においては「長安ニ一人ノ

女有ケリ」と前者の具体的な紹介にとらわれず、全く抽象的に紹介している。これに対して源平盛衰記は「東帰の節女と云ひけるは、長安大昌里人と云ふ者が妻」というように、大昌里人を人名とするほかは、近衛本孝子傳に近い伝えかたをしており、延慶本も同じく「東帰の節女と是を云。長安大昌里人の娘」とほぼ同様の伝え方をしているのである。⁽⁴⁾

一体、「京師」↓「東帰」の変化については、先に私は、これは本説話伝承の過程で生じた誤読にともなう誤写であろうと指摘しておいたが、おなじく船橋本孝子傳に認められる特殊な表記についても、それらはおそらく「冒」は「昌」、「郎」は「節」の誤写であろうと想像する。(ちなみに、注好選集が「郎女代枕」と標題をかかっていることは、この間の事情を端的に示す事例とみられる。)しかしながら、この孝子傳二本間にとめられる「冒里」「大昌里」の相違は、本説話の源平盛衰記への伝承経過を考えるうえでやはり注意を要するであろう。なぜならば、盛衰記はこの限りにおいては少なくとも船橋本孝伝に記録された「東帰節女」を直接の粉本としたのではないと考えられるからである。

その他、本節女傳をめぐる前記各本の本文関係のうえで注意されるのは、源平盛衰記における同説話の結びの部分、すなわち(敵終)に節女が夫を招きて、長く骨肉の昵をなしにけり」とある特に傍点部分の表現である。この表現は「京師節女」には見あたらないが、船橋本孝子傳「東帰節女」には「(仇人)乃解仇心、永如骨肉也」とあり、また、今昔物語集に「(敵)永ク心ヲ止メテ、始メテ骨肉ノ契ヲ成ケリ」とあるのに類似する。これは、かならずしも偶然の一致とはいいきれないものがあるように思われる。ちなみにこの「骨肉」という表現は近衛本孝子傳

「東婦節女」の該当部分には用いられていないのである。

以上のごとく、限られた資料の間においても、その本文にはかなり複雑微妙な変化がみとめられるから、源平盛衰記における「東婦節女」が果してどのような先行同説話を粉本としたかを早計に論じることができない。ただし、以下の事柄に限っては、現段階において一応の整理は可能のように思われる。すなわち、源平盛衰記における「東婦節女」伝は、(1)孝子傳収載の同説話のごとく「東婦」という節女名を有し、それは「長安大昌里人妻」として伝えられ、(2)節女の身替わり部分については「東首」に対して「西首」という説話的増益が認められ、しかも(3)「骨肉」という表現をもって事件後の仇敵関係の終末を語った「東婦節女」伝を媒体として記述されたものであろうということである。このかぎりにおいて、船橋本近衛本孝傳における「東婦節女」の本文は、そのいずれも源平盛衰記における「東婦節女」の直接粉本とは考えられないのである。ただし、孝子傳の類は、たとえば「日本国見在書目録」(藤原佐世撰)によれば、当時、十五卷本孝子傳(弘決外典抄)その他があったことが知られるのであり、なお、漢籍叢書目録等に記載された書目も数種に及んでいることであるから、おそらく源平盛衰記はそれらのいずれかに収載された「東婦節女」伝によって、文覚発心談の異朝における先蹤譚としての「東婦節女」伝を書いたであろうこと、なお延慶本平家物語における「東婦節女」伝は、更にその内容に発心説話的色彩を加味して、文覚発心談との有機的な関連性を独自に構想したものであろうことは、容易に想像される。(諸孝子傳収載の現存「東婦(京師)節女」傳の採集とその比較検討が残された課題であることは十分承知しているが、この点については他日を期したいと思う。)

三 文覚発心談の形成過程

既述のごとく、源平盛衰記および延慶本平家物語に伝えられた文覚発心談は、ともに「東帰節女」伝を付随しているが、これは、平家物語が他の章においてしばしば異朝の先例を引きならべ、それによって平家物語独自の物語内容の裏打ちを試みているように、文覚発心の直接動機として語られる人妻誤殺事件——裏返しにみれば、我が身を捨てて夫の生命を守ることに⁽⁶⁾よって婦節を全うした人妻の哀話——の信憑性を強調しよう⁽⁶⁾と意図したものであろうと推察される。しかしながら、そのことは結果的には骨子・内容ともにぎわめて密接な両者の類似性からみて、この先蹤説話として紹介された「東帰節女」の伝こそ外ならぬ文覚発心談の原型であったことを証明しているように思われるのである。換言すれば、源平盛衰記その他増補本系平家物語に至って、一連の文覚談の中に位置付けられた文覚発心談は、中国世俗孝子譚「東帰（京師）節女」の発心説話化としての性格を有するものであったと考えられるのである。

さて、「京師（東帰）節女」伝が異朝に生まれ本朝に伝わって、その説話的生命を持続しながら人口に膾炙したゆえんは、本質的には、身を殺して示したいわゆる節女の稀有の仁義の賞讃にあったが、同時に、夫との身替わり死の手段のいたって猟奇的な構想（語り方）に負うところもまた多かつたと考えられる。既に指摘したように、孝子傳以下に伝えられた「東帰節女」がその粉本と目せられる京師節女に比較して特に身替わりの方法について説話的増益の跡を示していることは、右の事情を物語る事例と認めることができよう。またこのことは「東帰節女」よ

り「文覚発心談」への転成の方法についても同じく顕著に認め得るのである。たとえば、増補本系平家物語各本にいたって、それぞれ定着をみた文覚発心談の類をみると、既に死を覚悟した人妻は、先ず夫に酒を強いて酔い伏させ、その髪型を変え、衣服を替え、あるいは寢室の枕の向きを変えて盛遠の目を欺くなど、その身替わり部分に読み手聞き手の好奇心をそそるに十分な趣向を添えて物語っているが、いずれもその根底には「東帰節女」の該部分のあの猟奇的性格がずっしり重く横たわっていることを見逃がし得ないのである。そして、この意味において特に注目すべきは、源平盛衰記における文覚発心談の該部分に見られる以下のごとき表現であろう。すなわち——

所詮盛遠の手を逃がれない身の不運を悟った袈裟は、既に死を覚悟のうえて「誠に浅からず思召す事ならば、唯思ひ切つて左衛門尉を殺し給へ」と誘い、その具体的な手筈を盛遠に糺されて、「我家に帰つて、左衛門尉が髪を洗はせ、酒に酔はせて内に入れ、高殿に伏せたらんに、ぬれたる髪を搜つて殺し給へ。」とかたり、実際の身替わりの場面については「一女、暇を得て家に帰り、酒を儲け渡を請じて（中略）我が身も呑み、夫をも強ひたりけり。元来思ふ中の酒盛なれば、左衛門尉前後不覚にぞ飲み酔ひたる。夫をば帳台の奥にかき臥せて、我が身は髪を濡らし、たぶさに取つて烏帽子を枕に置き、帳台の端に臥して、今や今やと待つ処に、ぬれたる髪を搜り合ひて、唯一刀に首を斬り、袖に裹みて家に帰りけり」と語っているのである。闇のなかに盛遠が目ざす渡の「濡れたる髪」（実は袈裟の髪）を搜り当て、唯一刀のもとにその首を切断する右のくだりは、その悽愴感・鬼気感を盛りあげるに十分なものがあり、他本の該部分にみる煩雑な場面設定とは比較を絶して効果的である。しかしながらわたくしは、この「濡れたる髪」という設定は盛衰記における文覚発心談執筆者の独創ではなく、実は彼の劉向烈女伝収載の

「京師節女」の本文に認められる節女の身替わりの条件の一つ「新ニ沐シテ東首シテ臥ルハ則チ是(夫)ナリ」「…
…因リテ(節女)自ラ沐シテ楼上ニ居リ…」にいちはやく着目して、これを巧みに活用した文芸的手腕による設
定であったと推測する。そして、右の推測に重大な誤りがないとするならば、源平盛衰記における「文覚発心談」
ならびにその先蹤説話「東帰節女」が粉本として用いた先行同説話は、前節において一応整理をした具備すべき四
つの条件のほかに、「新沐」「自沐」という、「京師節女」にみられる一条件をも添加しなければならぬと考えら
れるのである。したがって、前節にも述べたように源平盛衰記は、先ず「東帰節女」の採録については、④節女の
名を「東帰」として伝え、しかも本文のなかに前記のごとき具備すべき五つの条件を含んだ一本を直接粉本とした
か、あるいはまた⑤二以上の同説話を校合のうえで独自の本文を形成したか、そのいずれかであろうと考えられ
る。ただし、この種の説話の伝承は、文献より文献への道すじのほかに、たとえば口頭説話として世上に流布伝播
したものを、改めて筆録する場合も当然あり得ることであるから、右の二点にのみ力点をおいてながめることに
してはいまはなお慎重でありたい。いずれにしても、源平盛衰記その他の増補本系平家物語にいたって記載された
文覚発心談は、盛衰記や延慶本平家物語にその先蹤説話として並記された「東帰節女」伝を手がかりとするとき、
それは漢の劉向烈女伝(古列女伝)収載の「京師節女」伝ないしはその伝承過程に位置付けられる孝子傳の類に収録
された「東帰節女」伝を材料に、これに文覚発心談創作者独自の構想をからめながら形成したいわゆる発心説話で
あったことは、も早動かし得ない事実として認めてよいと思うのである。

四 文覚発心談の付加とその理由

次に、小論の冒頭に触れたごとく、源平盛衰記曾卷第十八「文覚頼朝に謀叛を励め進らす事」の一章をみると、そこには遠藤盛遠（後の文覚）の前半生の歩みがまとまった形で興味深く物語られているが、実はこの部分は、既に検討した発心談一篇の内容といかにかかわるかという点で重要な問題を含んでいる。やや煩瑣となるが、この問題の究明は平家物語における文覚発心談定着の様相を知るうえの一つの手がかりとなると思うので、以下暫くこの点に触れておくことにする。

さて、文覚の出生に関する秘話ともいうべき部分を先ず抄出してみると――

彼の文覚は渡辺党に、遠藤左近将監盛光が一男、上西門院の北面の下臈なり。其の母未だ子なし。夫妻共に家の絶えなん事を歎きて長谷寺の観音に詣でて、七箇日祈り申しければ、左の袖に鳶の羽を賜はると夢に見て、懐妊して儲けたる子なり。父は六十一母は四十三にして生れたる一男なり。母は難産して死にぬ、父赤子を抱きて歎きける程に、事の縁ありける上便宜の方人にもとおもひて、丹波国保津荘の下司、春木の二郎入道道善と云ふ者これを養ひけるが、三歳の時父盛光も死ににけり。堅固の孤子なりけれども、血の中より手馴れたれば、さすが捨て難うして道善育みけり――

と語られている。つまり文覚の出生は、父母の深い願いと長谷観音の利益にささえられたものであったが、不幸にも母は、彼のあたらしい生命に替わるように難産して死に、父もまた僅か三歳の彼に心を残しながら世を去って

しまふなど、まことに不運な運命を担っていたのである。かくて生後間もなく春木道善のもとで養育された彼は、成長するにつれて全く手のほどこしようもない「面張牛皮の童」となり、「荘内の童を催し従へて野山を走り田畠を損じ、馬牛を打張る」など無類の悪童ぶりを發揮したと語られているが、やがて十三歳になって元服、その名を遠藤武者盛遠と改め、そのまま上西門院の北面となった後の彼について引続き語られる以下の部分は、特に注意される。

（盛遠は）少きより時々物狂はしき氣ありけり。容顔は勝れざりけれども、大の男の力強く心剛なり。武芸の道人に勝れて、道心も流石ありけるとかや。常には母が難産して死にける事を云ひて泣き、父が事を恋ひて悲しむ。生年十八にて、いとほしき女に後れて、髪を切りて遁世しき。

右の傍点部分の文脈をたどってみるならば、盛遠の道心というものは彼を産み落としながら難産の為に死んだ母、三歳にして失った父に対する追慕の念にもよおされたものであったような書きぶりになっているが、ついで何の前ぶれもなく「いとほしき女に後れて」剃髪遁世したと結ばれているのは、いかにも唐突である。この「いとほしき女に後れて」という表現は、ここより数章節を経た後に位置付けられている既述の文覚発心談に読み及んで、はじめてそれが盛遠と袈裟の事件を意味するものであったことを知り得るが、右の文覚の出生より発心出家に到るまでの記述のしかたからみても、彼の道心の契起と父母追慕の念との深い因果関係にくらべて、この「いとほしき女に後れて」という表現内容は全く説明されておらず、その句の存在自体いかにも不自然にさえ思えるのである。

ところで、このことに関連して更に注意を惹くのは、同卷「竜神三種の心を守る事」の一章で文覚自身が伊豆下

向の船中で語る次のことばである。

……（吾は）斯様に心急々にして物狂ひの様なれども、母は吾を生まんとして難産して死にぬ。父には三歳の時別れぬ。憑む方なき孤子なれば、幼き子を思ひおきけん父母の心の中、いかばかりの事案じけんと思へば、親を思ふ志今に洩からず。妻に後れて出家入道すれども、本意は至孝報恩の道念より起れり。（中略）閑林出家と誓ひたれば、十八歳にして入道して、再び家に帰らず……

右によれば、文覚出家入道の本意は、明らかに亡き父母に対する「至孝報恩」の道念にあったということになる。ところで、右の部分に「妻に後れて出家入道すれども」とある「妻」とは、これも後出の発心談に照らすときは、盛遠の手から身をもって夫の命を守ったかの源左衛門渡の妻袈裟を指すとみる以外にはないが、その袈裟のことを出家後の文覚自身が自分の妻であったというのは、いささか適切を欠くように思われる。おそらくこの場合の「妻に後れて」という表現は、元來出家の動機として一般に考えられる世間の通例を指した謂であらう。つまり「世間一般の例には」妻に後れて出家入道すれども（吾は然らず。吾が出家入道の）本意は只至孝報恩の道念より起れり」という意味で書かれたものであらう。⁶⁾それを「妻に後れて」は、文覚が妻に遅れたとも解し得るところから、既述のような特殊な女性問題にかかわる発心談が付加されたのではなかったかとさえ思われるのである。そして先に指摘をした「いとほしき女に後れて」の一句が文覚出生の秘話全体の文脈にいかにも熟し合わないのは、既存の文覚一連の物語のなかに、それとは別の成立事情をもった文覚発心談一篇を付加した際に、そのための伏線のような形で加筆したからではなかったかと推定されるのである。しかし、この種の合理化がおこなわれたとしても、実際に

は先に抄出した文覚の出生ないし出家までの部分、あるいは、それに引き続いて語られる出家後の修行のありかたと、後の発心談一篇の記述内容との間には、なお覆うべくもない相互矛盾が明確な形で露呈している。すなわち、①先には盛遠は難産で母を失い、生後間もなく保津荘の下司春木二郎道善に託けられ、また三歳で父をも失い、ついには「堅固の孤子」となってしまったが、「血の中より手馴れたればさすがに捨て難うして」自来元服の年まで道善の手もとで養育されたと語られているが、これに対して発心談では、盛遠に脅迫された小母の衣川のことばとして、「抑和殿は我には甥、我は和殿に姨母、(中略)就中御辺の母死して後は孤子なれば、孫子を思ふ様にいとほしうし奉る……」と語られているのは、あきらかな物語内容上の矛盾であり、また②出家後の文覚の修道の模様については先の部分には「……十八歳にて出家して一十三年の間は、或は断食し或は持齋せり(中略)座禪繩牀の室には、本尊持經の外は物なし」と徹底した脱俗の姿を叙しているが、これに対して発心談では、「(文覚は)さる知法効験の時までも、昔の女(髮髻)の事思ひ出して、常は衣の袖を絞りけり。若しや慰むとて彼の女の影を移して本尊と共に頸に懸けて、恋しきにもこれを見、悲しきにもこれを弔ひけるこそ、せめての事と哀れなれ」と叙しているのは、やはり相互矛盾といわざるを得ない。なお③文覚発心談では、盛遠の発心出家は彼が十七歳の時となっているが、それ以前の個所には「十八にて入道」「十八歳にて出家……」と一再ならず述べている矛盾については、既に参考源平盛衰記の編者が指摘したとおりである。思うにこれらの諸点は彼此別章に書かれたものであるから、それぞれの個所では特に問題なく読み過ぎされやすいが、これを一連の文覚物語として直接に相互比較してみると、その自家撞着の様態はまことに明瞭である。(8)

一体、右のごとき記述上・内容上の相互矛盾は何に起因するかを考えてみると、それは源平盛衰記が文覚に関する一連の物語に加えて、この本独自に彼の出生の秘話ないし発心の由来をある程度まとめた形で詞章化した後、更に文覚物語充足の立場から、それらの部分とは全く成立の事情を異にした発心談一篇を付加挿入した結果生じた、と考える以外には説明不可能と思われるのである。

四 結びにかえて

以上、増補本系平家物語に採録された文覚発心の物語について、特に源平盛衰記の場合を中心にこの物語の生成・定着の事情、ならびにその説話的性格を明らかにすることに努めた。

ところで、平家物語に画かれた文覚一連の物語をみると、そこには意外に多くの証明可能な歴史的事実が含まれているという。たとえば、彼が伊豆の頼朝に平家追討の謀叛を勧めるまでの前半部分に限ってみても、先ず高雄神護寺再建のための勸進発願のこと、ついで院の御所法住寺における勸進のための狼藉事件、その結果としての伊豆流罪、伊豆護送の船中における長期断食の荒行など、いずれも史実を根拠として語られたものであるといわれる。⁽⁹⁾しかしながら、平家物語はもとより純粋の史書ではない。源平興亡の歴史的事実を根底に据えながらも、これに相等の粉飾・虚構を施し、その間に史実にもとづかない挿話をも相等におさめないおさめていることもまた事実である。いま、平家物語に画かれた文覚についてみるのに、そこに一貫して看取されるのはまさしく超人的ともいえる彼の裂帛の道念であり、また、それを証明するに十分な豪快きわまる諸行為、靈妙不可思議な効験の数々であって、そ

の印象はいたって強烈なものがある。かくて、平家物語によって創造され肉付けされた文覚の特異な人間像は、歴史的實在の文覚をより以上に躍如たらしめ得たといふべく、この語られたる文覚の人間像が、やがて必然的に、彼にもっともふさわしい発心談増設の機運を享受者一般の心にうながすにいたったものと私は考えるのである。見方をかえるならば、平家物語を通じて、稀代の荒聖文覚の人となりに接した人々の自然発生的な要求に応え得る発心談とは、当初よりして一般的な発心生起の常識を破った特異な性格のものでなければならぬという創作上の制約をなっていたのであり、かくて誕生をみたのが、中国世俗孝子譚「京師（東帰）節女」を粉本とした公算のきわめて濃厚なかの発心談一篇であつたと考えられるのである。それは、おそらくは、漢籍に親炙し仏教的教養をも身につけた当時の一知識人の創案であつたであろうし、これがやがて増補本系平家物語諸本の編纂者の手によって、それぞれの立場から採録されるにいたつたものであらう。もちろん、各本は各本の立場から、自本にもっともふさわしい形においてこれを再構成し、一連の文覚物語の中に独自に定着せしめたと考えられるのである。

さて、思うに、この平家物語増補の過程において、語られた文覚の人間像がおのずからに創造をうながしたと考えられる「文覚発心談」は、既にもるごとくまことに猟奇的な内容を持つて物語られている。おそらく当時の享受者は、この発心談に接するにおよんで、一種の衝撃にも似た感動と賛仰の念を抱いたにちがいない。しかし、一歩深くこの文覚発心談の内容に立ち入って反省してみると、その感動ないし賛仰の念は、遠藤武者盛遠の奇特な頓悟的道念に対してよりも、むしろ盛遠に魅入られた薄幸な人妻の、あの献身哀話にもよおされるところが多かつたのではないか、という一抹の疑問がつきまとうのを覚える。なぜならば、盛遠を忽然として発心せしめた人妻の死

は、その経緯からみてあまりにも無慚かつ無情であり、名状しがたい哀感をもよおさせるが、おそらく当時の享受者にしても同様、そのような感慨を素朴にいだいたに相違ないと思量されるからである。このような意味において、粉本「京師（東帰）節女」の優位性は、事実上文覚発心談一篇の主題の分裂をさえもたらしかねないものがあると思うのは私だけであろうか。ちなみに、増補本系平家物語各本のほとんどがこの非業の人妻について「情これ案ずるに、この女房は観音優婆夷の身を現じて、我等が道心を催したまふと観ずべし」（盛衰記）「情案るに、此女房は、観音の垂迹として吾等が道心を催し給ふと観ずべし」（延慶本）「つらつらことの心を案ずるに、彼の女房と申は、しかしながら観音の変化にて、此の人々を仏道に入れ給ひけるとぞ覚えたる」（長門本）などと、夫の言に託し、筆録者の評言に託して頌歌せざるを得なかった理由は、一にかかつてこの辺に存在したように思われるのである。と同時に、このような観音利生談の性格を付与することによってこの文覚発心談一篇は、一個の独立した発心説話として流布伝播しつつ命脈を保ち続けたであろうと考えられるのである。¹⁰⁰

- (1) 八坂本系平家物語一本に「鳥羽ノ典女ガ為ニ……」とあるところをみると、当時既に延慶本や四部合戦状本によって伝えられているような「盛遠と鳥羽の秋山刑部左衛門の妻」にまつわる文覚発心談が一部に流布していたのではないかと思われる。そして、八坂本がその内容を伝えなかったのは、特に文覚発心談増設の必要はないと判断したからであろうと思われる。
- (2) 慈鳥者鳥也、生於深林高巢之表、銜食供鴉口、不鳴自進羽翻勞悴不復能飛、其子毛羽既具、將到東西取食反哺其母、禽鳥尚余況在人倫乎、鷹亦銜食貽兒忽（？）銜食貽母、此鳥皆孝也
- (3) 「京師」↓「東帰」の変化については、「京」の古体文字「京」が「東」に、「師」の略体文字「師」が「婦」に誤写されたものと推定する。なお、私聚百因縁集に「東坂」とあるのは「歸」の別体「坂」を「坂」に誤り伝えたものと推定する。

ついでながら、長門本における「東武」南都本における「東吼」は、共に「東婦」の音写の際の誤記であろうと思われる。
(4) 「長安大昌里人妻」は「長安大昌里ノ人ノ妻」と読むのが正しく、これを「大昌里人」と人名に解したのは盛衰記・延慶本の読みあやまりと思われる。

(5) 京大人文科学研究所漢籍書目録に晋蕭広済・晋徐広・劉宋王歆之・周景武・劉宋師覺授・宋躬虞盤佑・劉宋鄭緝之等の編による「孝子傳」の名がみえる。

(6) 平家物語「蘇武」「咸陽宮」その他

(7) 延慶本によれば「父にも母にも子にて候之間、親を思ふ志今になをあざからず。妻に後れては出家入道はすれども、本意は只至孝報恩の道心也」とある。

(8) 延慶本の文覚発心談をみると、出家後の文覚について「……三衣一鉢の外には蓄へたる一財なく、座禪繩床の肩宮には本尊持経より外に持たる物なし。寒地獄の苦みを今生に見て後生にのがれんとぞ誓ける。知法有験の時までも昔の女の事わすれずして常には衣の袖をしぼりけるとかや。若しや心をなぐさむるとて昔の女の形を絵にかきて本尊と共にくびにかけて身を放ざりける事こそ哀なれ」と叙しているが、①②の間の矛盾は盛衰記にもまして明瞭である。

(9) 仏教文学研究会編「仏教文学研究」第三集所載、山田昭全「平家物語における文覚像の造形」参照。

(10) 永井義憲著「日本仏教文学研究」所載「平家物語と観音信仰」における所説を参照すると、平家物語にあらわれた文覚と観音信仰の関連、あるいはその発心説話の観音利生譚の性格よりみて、この発心説話一篇の生譚・定着・管理・伝播などについての別の考察が可能のように思われる。